

## 似像モデルのパズル——『パルメニデス』132c-133a——

久保 徹

ノエマ説があっけなく退けられたのち、ソクラテスは一転して確信に満ちた調子で、アイデアの分有を原範型-似像の関係としてとらえる似像モデルの考え方を提示する。

「むしろパルメニデス、次のようであることが私にはきわめて明らかです。すなわち、これらのアイデアは、ちょうど範型 (παράδειγμα) のようなものとして自然本来のうちに不動のあり方をしていて、それ以外のものは、これらに似ており (εοικέναι)、これらに似せられたもの (ὁμοιώματα) であって、そしてこのもろもろのアイデアの分有 (μέθεξις) が他の事物のもとに生じるとは、他の事物がそれらのアイデアに似せられる (εἰκασθῆναι) というにほかなりません」(132c12-d4)

Cornford らがつとに指摘するように、ここに示された似像モデルによるアイデアの分有のとらえ方は、プラトン中期のアイデア論から後期のアイデア論に向けて一貫して指向されていた立場であると言えよう<sup>1</sup>。

しかしパルメニデスは、アイデア論にとって正統であるはずの、この分有の似像モデルに対し、直ちに以下のような困難を提起してこれを退ける。

「(B1) すると、もしなにかがアイデアに似ているとするならば、かのアイデアがその似せられたものに——それがアイデアに似せられた限りにおいて——似ていないということがありうるだろうか？ それとも、似ているものが似ているものと似ていないとする、なにかよい工夫でもあるだろうか？」

「ありません」

「(B2) ところで、はたして、似ているものは似ているものと同じ一つのアイデア<sup>2</sup>を分有している (μετέχειν) ということは、大いに必然ではないかね？」

「必然です」

「(B3) そして、それら似ているものどもが、それを分有することによって似ているものであるところのものとは、まさにかのアイデアであることになるのではないかね？」

「まったくその通りです」

<sup>1</sup> Cornford, p. 93, Fujisawa, pp. 40-56, Allen 1983, pp. 158-159 = Allen 1997, p. 180, Gill, p. 42.

cf. *Phd.* 74d-75b, *Rep.* VI 509d-511e, VII 514a-516e, *Phdr.* 249e-250b, *Tim.* 49a-52d.

<sup>2</sup> 写本通り、εἴδους を削除せずに読む。B3 との違いは、似ているためには同一のアイデアを分有せねばならないということから、そのアイデアが「まさにかの (Fの) アイデア」(後述) と特定されることへの推移にある。cp. Allen 1983, p. 305 n. 65 = Allen 1997, p. 181 n. 28, Cherniss, pp. 365-366 n. 6; pace Schofield, pp. 62-63, Gill, pp. 44-45.

「(B4)すると、なにかがアイデアに似ているということも、またアイデアが他のものに似ているということも不可能である。さもなければ、そのアイデアのほかにつねにまた別のアイデアが現われてくることになるだろう。そして、またそのアイデアがなにかに似ているならば、さらにまた別のアイデアが、ということになり、かくて、アイデアが自身を分有するものに似ているものとなる限りは、その都度つねに新たなアイデアが生じることがけっして止むことはないであろう」

「あなたのおっしゃっていることは、この上なく真実です」

「したがって、他の事物は類似という仕方ではアイデアを分取するのではなく、なにか他の分取の仕方を探さねばならないのだ」

「どうやらそのようです」(132d5-133a7)

似像モデルのパズル、ないし「第三の人間論」の second version と呼ばれる、このパズルの困難の所在とその原因を明らかにし、バルメニダスの批判がはたしてプラトンのアイデア論にとって有効な議論であるかどうかを検討したうえで、似像モデルの意義について考察することを、本稿は課題とする。

## I

まずはじめに、バルメニダスの議論の論理構造を分析し、このパズルによって提起された困難がいかなるものであるかを見ておこう。

Vlastos によれば、この議論においても、先の「第三の人間論」(132ab)に見られたと同じ二つの想定が暗黙のうちにはたらいっているという<sup>3</sup>。すなわち、

S P : Self-Predication Assumption (自己述定の想定)

N I : Non-Identity Assumption (非同一性の想定)

である。S Pとは、アイデアは自己述定されうる、つまり、一般にFのアイデアはFという性質をもつ(たとえば、美のアイデアは美しい)との想定であり、N Iとは、なにか(アイデアを含む)がFであるのは、それ自身とは別のFのアイデアを分有することによる、との想定である。議論が妥当な推論として成り立つためには、これら二つの想定が不可欠だと Vlastos は分析する。

これら二つの暗黙の想定を含めてこの議論の構造を再構成すると、次のようになる。

B 1 Fのアイデア( $\Phi$ )は、その似像( $F_1, F_2, F_3 \dots$ )に似ている。

B 2 互いに似ているものは、同一のアイデアを分有する<sup>4</sup>ことによって似ている。

<sup>3</sup> Vlastos, pp. 241-244.

<sup>4</sup> 故意にすり替えているのではないと好意的に解釈するとしても、「互いに似ているものは、ともに同一のアイデアに似ることによって似ている」と、そもそもこのような説明の仕方がすでにそれ自身のうちに循環を内包しており、奇異な内容ではある。cf. Cherniss, p. 366 n. 1.

- S P Fのアイデア(Φ)はFである。
- B 3 したがって、それらがともにそれを分有することによって似ているところの同一のアイデアとは、かのFのアイデア(Φ)でなければならない。
- N I しかるに、Fのアイデア(Φ)がFであるのは、それ自身とは別のFのアイデアを分有することによってである。
- B 4 それゆえ、Fのアイデア(Φ)がその似像(F<sub>1</sub>・・・・)に似ているならば、別のFのアイデア(Φ<sub>1</sub>)を分有することによるのでなければならない。そしてまたその別のFのアイデア(Φ<sub>1</sub>)がその似像(Φ, F<sub>1</sub>・・・・)に似ているならば、さらにまた別のFのアイデア(Φ<sub>2</sub>)を分有することによらねばならない……。かくて、アイデアがその似像に似ているならば、その都度つねに新たなアイデアが際限なく現われることになる。

アポリアーの構造としては、「第三の人間論」と同じ議論構造である。

つまり、アイデアの分有を似像モデルによってとらえようとするならば、アイデアが似像に似ていることの説明のためにその都度別の新たなアイデアが必要とされ、アイデアが無限背進に陥り、それぞれ一であるはずの個々のアイデアが多であることになってしまう、というのである。

この困難の生じた原因はどこにあるのだろうか。

## II

一つには、「第三の人間論」の場合と同様、N Iの想定に困難の原因を認めることができよう<sup>5</sup>。Fのアイデア(Φ)とその似像(F<sub>1</sub>, F<sub>2</sub>・・・・)が似ていることの説明を仮にそれらがともにFであるという点に求めるとしても、Fのアイデア(Φ)がFであることの原因をそれ自身とは別のFのアイデア(Φ<sub>1</sub>)の分有に帰さねばならぬ理由はない。Fのアイデア(Φ)がFであるのは、もっぱらFのアイデア(Φ)自身の自己原因によるのであり、他の何ものによるのでもない<sup>6</sup>。したがって、パルメニデスの議論に暗黙の前提として潜在する、アイデア論本来の立場には即さないN Iの想定を否定することによって、パズルは容易に解消されうる。

また、そもそもB 2の奇妙にグロテスクな説明に困難の原因を認めて、B 2以下をひとまとめに切り捨てるという観点もあろう<sup>7</sup>。似像はまさにアイデアの似像であるがゆえに、アイデアと似像とは互いに似ている。そのことに、それ以上の説明はいっさい必要はない。したがって、ともにFであるという点にすら、類似性の根拠をさらに求める必要はない。

<sup>5</sup> Bluck 1956, pp. 36-37, Bluck 1957, p. 124.

<sup>6</sup> *Phd.* 100c: 「美のアイデア以外のものが美であるのは、美のアイデアを分有することによってである」。cf. Fujisawa, pp. 35-36; cp. Bluck 1957, p. 127 n. 1.

<sup>7</sup> Cherniss, pp. 365-368, Fujisawa, p. 50.

それをあえて——しかも別のアイデアとの類似性（分有）によって（NI）——説明しようとするところに、B2の明らかに作為的な自己矛盾がある。

いずれの解釈をとるにせよ、困難の原因はアイデア論自身——とりわけアイデアの分有の似像モデルによる記述——の側にあるのではなく、もっぱらその誤った理解や不適切な説明の持ち込みによるものであり、それゆえ、このパズルのもたらす困難はアイデア論として有効な批判でも致命的な困難でもないことが明らかにされた。

ところで、ここで Cornford に興味深い指摘がある<sup>8</sup>。

アイデアがその似像に似ているとしても、だからといって、両者がさらに同一のアイデアに似ていなければならないという議論は成り立たない、と Cornford は論じる。この人とあの人が似ているということは、両者が人間のアイデアを分有している（すなわち、その似像である）ということと等価ではない。したがって、人間のアイデアがその似像である一人の人間と似ているとしても、そのことは人間のアイデアがそれ自身もしくは第二の人間のアイデアを分有する（その似像である）ことを帰結しない——。そして、こう付け加えている。互いに似ているとは、ともに同一のアイデアを分有する（その似像である）ことであるという議論は、二つの事物が似ているのは両者が〈似〉のアイデアを分有するときであるという、ソクラテスのもとの言明（129a）にそぐわない。われわれはただ、人間のアイデアは〈似〉のアイデアを分有すると言えばよいのである。この類似関係を、似像と原範型（アイデア）の関係——すなわち、ともにFである関係——と同一視しない限り、いかなる無限背進も含まれない、と。

たしかに、Cornford の指摘するように、アイデアとその似像が互いに似ているということと、両者が同じアイデアを分有し、ともにFという同じ性質をもつということは、等価ではない。むしろ、アイデアとその似像とは、Fであるというその点において似ているわけではあるけれども、Fのアイデアの似像がFであることと、それがFのアイデアに似ていることとは、やはりそれ自体としては区別されるべき別の事柄であろう。似像としての感覚的事物は、Fでありながらも、なおその不完全さゆえに「アイデアに似ているとともに似ていない（劣っている）」（*Phd.* 74d-75b）と言われねばならない存在であるのだから。

だが、さらに注目すべきは、似像がアイデアに似ているという事態は、両者が〈似〉のアイデアを分有することによってこそ成り立つという指摘である。アイデアと似像とがともにFであるという事態と、それらが互いに似ているという事態が、区別されるべき別の事柄であるとすれば、両者が互いに似ていることの説明は、両者がともにFであることを説明するFのアイデアの分有とは、別のところに求められねばならない。129aでのソクラテスの定式化によれば、それはまさに〈似〉のアイデアの分有に求められるべきはずであった。

「あるものは〈似〉のアイデアを分取することによって・・・似ているものとなり、あるものは〈不似〉を分取することによって似ていないものとなり、あるものは両方を分取することによって両方になる・・・」（129a4-6; cf. 131a1）

もっとも、Cherniss のように、似像はアイデアの似像なのだから互いに似ているのは当然

<sup>8</sup> Cornford, p. 94.

だと強硬に主張し、それ以上の説明を拒否することは可能であろう。むしろ、似像モデルの趣旨からすれば、きわめて正当な主張であると言わねばならない。しかし、ここではあえて、アイデアとその似像との類似関係を〈似〉のアイデアの分有によって説明するとすれば、それがアイデア論にとってどのような含意をもちうるかを検討してみたい。

さて、アイデアとその似像の類似関係を〈似〉のアイデアの分有によって説明する限り、いかなる無限背進も帰結しない、と Cornford は論断した。ところが、まさに Cornford のこの着眼がおそらく引き金となって、テキストの別の読み方の可能性とともに、このパズルの困難を別の種類の無限背進 —— 〈似〉のアイデアの無限背進 —— に見出す解釈を触発することになる。

### III

アイデアとその似像の類似関係を〈似〉のアイデアの分有によって説明しようとするところに、従来理解されてきたのとはまったく別種の無限背進が生じうる、そして似像モデルのパズルがじつはそのような議論を構成するよう意図されている、というテキストの読み方の可能性に気づいたのは、Allen であった<sup>9</sup>。この新たなテキスト解釈に立つとき、議論構造はまったく別の様相を呈し、似像モデルのパズルの困難は〈似〉のアイデアの無限背進に帰着することになる。

意味内容が大きく変わるのは、B2, B3 の部分である。

「(B2) ところで、はたして、似ているものは似ているものと同じ一つのアイデア (ἐνὸς τοῦ αὐτοῦ εἶδους) を分有しているということは、大いに必然ではないかね？」

「必然です」

「(B3) そして、それら似ているものどもが、それを分有することによって似ているものであるところのものとは、まさにかのアイデア (ἐκεῖνο ... αὐτὸ τὸ εἶδος) であることになるところではないかね？」

「まったくその通りです」

B2 の「同じ一つのアイデア」では、まだ対象が漠然と曖昧なままに指示されているが、B3 でそれが「まさにかのアイデア」、すなわち〈似〉のアイデアであることが判然とする。B4 の意味もまた、それにとまって変化する。

「(B4) すると、なにかがアイデアに似ているということも、またアイデアが他のものに似ているということも不可能である。さもなければ、そのアイデア (〈似〉のアイデア) のほかにつねにまた別のアイデア (〈似<sub>1</sub>〉のアイデア) が現われてくることになるだろう。そし

<sup>9</sup> Allen 自身は、テキストが意図的に曖昧に書かれていると見なし、別の新たな読み方の可能性とともに、それからの間接的な含意として従来の標準的な読み方の可能性をも併記していたが (Allen 1983, pp. 159-162, Allen 1997, pp. 180-184)、後に Schofield, pp. 61-66 と Gill, pp. 43-45 が、この読み方をより優先すべきものとして積極的に提唱している。

て、またそのアイデア（〈似<sub>1</sub>〉のアイデア）がなにかに似ているならば、さらにまた別のアイデア（〈似<sub>2</sub>〉のアイデア）が、ということになり、かくて、アイデアが自身を分有するものに似ているものとなる限りは、その都度つねに新たなアイデア（〈似〉のアイデア）が生じることがけっして止むことはないであろう」

当初、Fのアイデアとその似像の類似関係から議論は開始されるが、その類似関係を成り立たせる要因としてひとたび〈似〉のアイデアの分有が導入されると、それ以降は、〈似〉のアイデアとそれを分有するもの（その似像となるもの）との類似関係において、〈似〉のアイデアの無限背進が導き出されることになる。

議論の構造も、したがって、先とはまったく別の形をとる。

- B 1 Fのアイデア（Φ）は、その似像（F<sub>1</sub>, F<sub>2</sub>, F<sub>3</sub>・・・）に似ている。
- B 2 互いに似ているものは、同一のアイデアを分有することによって似ている。
- B 3 それらがともにそれを分有することによって似ているところのアイデアとは、かの〈似〉のアイデアでなければならない。
- B 1' 〈似〉のアイデアは、その似像（似<sub>1</sub>・・・）に似ている。 [= SPに相当]
- N I しかるに、〈似〉のアイデアが似ているのは、それ自身とは別の〈似〉のアイデアを分有することによってである。
- B 4 それゆえ、〈似〉のアイデアがその似像（似<sub>1</sub>・・・）に似ているならば、別の〈似〉のアイデア（〈似<sub>1</sub>〉）を分有することによるのでなければならない。そしてまたその別の〈似〉のアイデア（〈似<sub>1</sub>〉）がその似像（〈似〉, 似<sub>1</sub>・・・）に似ているならば、さらにまた別の〈似〉のアイデア（〈似<sub>2</sub>〉）を分有することによらねばならない・・・かくて、アイデアがその似像に似ているならば、その都度つねに新たな〈似〉のアイデアが際限なく現われることになる。

議論後半（B 1'以降）のアポリアーの構造は、「第三の人間論」と同型の構造に還元しうる。

困難は、アイデアの分有を似像モデルによってとらえようとするならば、アイデアが似像に似ていることの説明のために、その都度別の新たな〈似〉のアイデアが要請され、〈似〉のアイデアが無限背進に陥り、一であるはずの〈似〉のアイデアが多であることになってしまうということにある。

ここで断っておくならば、〈似〉のアイデアの分有は、似像モデルにおける分有（似る）の因果的な過程を説明することを目的とするものではない。もしそうだとすれば、〈似〉のアイデアに似る（分有する）ことがそもそもいかにして可能か、という循環論に陥ることになる。〈似〉のアイデアの分有は、むしろすでに分有の結果としてアイデアとその似像に見出される類似関係を説明するためのものである。

では、その困難の原因はどこにあるのだろうか。

この議論が「第三の人間論」と同型であるとするれば、それと同様に、困難の原因はN Iの想定に求められうるであろう。似ているもの（Fのアイデアとその似像）が似ているのは〈似〉のアイデアの分有によるのであり、さらに〈似〉のアイデアがその似像と似ていること

の原因をそれ自身とは別の〈似〉のアイデアの分有に帰さねばならぬ理由はない。〈似〉のアイデアがその似像と似ているのは、〈似〉のアイデア自身が自己原因として再帰的にはたらくからにはかならない。したがって、パルメニデスの議論に暗黙の想定として潜在する、アイデア論本来の立場に即さないNIの想定を否定することによって、このパズルもまた容易に解消されうる<sup>10</sup>。

したがって、テキストの別の読み方に立つとしても、似像モデルのパズルは、アイデア論にとって有効な批判でも致命的な困難をもたらすものでもないことが明らかにされた。

だが、この読み方が可能だとするならば、この別解釈を促す誘因となったCornford自身はおそらく、われわれがすでに従来のアイデア論の枠組みを逸脱していることに気づいてはいない。アイデアとその似像としての感覚的事物との——分有関係以外の——類似関係という関係性におけるアイデアの分有が、そこでは語られていることになるからだ。たとえば、美のアイデアと美しい事物が似ているのは、美のアイデアと美しい事物との類似関係において〈似〉のアイデアが分有されていることによる。あるいはさらに、それら美のアイデアと美しい事物とが〈似〉のアイデアの似像として〈似〉のアイデアと似ているのは、〈似〉のアイデアとそれらとの類似関係において〈似〉のアイデアが再帰的に分有されていることによるのだ、と。

#### IV

最後に、似像モデルの意義について考察をまとめておきたい。

もともと似像モデルは、テキストの議論の表面上は、一なるアイデアが多なる感覚的事物に分有されるという、アイデアの一と多の関わりを「似像」という着想によって克服することを直接の動機としている。

しかしそれは畢竟、次のようないずれもアイデアの離在性の問題に関わっている。

一つには、アイデアが感覚的事物から離れて自在し、いかなる感覚的事物のうちにも内在しないという点である。分有の内在モデルに代えて似像モデルを採用することによって、アイデア論はこの点をより明確になしえた。パルメニデスは、部分・全体のパズル(131a-e)において再三、この意味でのアイデアの離在性の原則を侵していた(131a8-9, b1-2, b5-6, c5-7)。アイデアと感覚的事物の関係を原範型と似像の関係としてとらえることによって、両者の間にいかなる物理的な関係を想定する余地をも払拭したのである。

<sup>10</sup> Schofield は、〈似〉のアイデアの無限背進を避けるために、第Ⅱ部での類似関係のとらえ方(ταύτων πεπονηθός: “being qualified in the same way”)に着目して、アイデアと感覚的事物の類似関係の説明を「同じFという性質をもつ」という点に求めようとする(pp. 69-72)。〈似〉のアイデアは捨てられ、プラトン後期においては、〈有〉〈同〉〈異〉などの関係概念に関わるアイデアは似像モデルでは語られなくなる、との見通しにSchofieldは立っている(pp. 76-77)。だが、第Ⅱ部における類似関係の扱いも一通りではない。Schofieldは、似るという事態の説明がταύτων πεπονηθόςというアイデア論に依存しない説明方式に移行している(139e8-9, 148a3, 158e-159a, 165cd)と言うけれども、はたしてテキストがそのような明確な移行を示しているか疑わしい。〈似〉〈不似〉のアイデアの分有による類似・不類似の説明は、159e-160aのみならず161a-c, 164aにも依然見られる。

もう一つは、感覚的事物はアイデアと対等に自在するのではないという点である。パルメニデスはこの点をも、アイデアの離在性と存在範囲をめぐる予備的確認のやりとり (130a-e) や「第三の人間論」のパズル (132ab) において、しばしば侵犯していることに気づかれた (130b1-3, 132a1-4)。似像モデルの重要な含意の一つは、感覚的事物はアイデアに対してその似像にすぎないとの位置づけにある。原範型と似像との関係に示唆されるような不可逆で垂直的な関係として、アイデアは似像としての感覚的事物に先立つ。この点に関して似像モデルは、アイデアと感覚的事物の存在の序列、アイデアに対する感覚的事物の、存在としての依存関係を明確に示すという意義をもつ。分有モデルにおいては、つねに主語にあたるものを、少なくとも言論の上では、措定せざるをえない。ともすればそれは、感覚的事物がアイデアの分有という事態に先立って、関係項の一つとして先在するという錯覚を与えかねない。分有についてのこのような誤解を予め避けるために、主語を必要としない、似像モデルの言語形式はきわめて好都合であると言える。

プラトン中期のアイデア論において、この似像モデルがつねに指向されてもいたことは、はじめに触れたように、たとえば、先の『パイドン』の想起説における記述 (74d-75b) などに明らかだが、『国家』の「線分の比喩」(509d-511e) や「洞窟の比喩」(514a-516e) にも同じ基調が示されており、また『パイドロス』の想起説 (249b-250b) にも、『パイドン』のそれに通じるモチーフが示唆されているよう。

後期に至り似像モデルが明示的に語られるのは『ティマイオス』においてであるが、そこにおいて感覚的事物は、ついに似像Fの基体となる「なにものか」(x) としての主語的位置をも抹消されて、ただ「場」(χώρα) に写されたアイデアの似像」としての位置づけのみを与えられることになる (48e-52d)<sup>11</sup>。

なお、先の別解釈に立つことが可能であるとするならば、これらに加えて、アイデアと感覚的事物との分有以外の関係 (たとえば、類似関係) におけるアイデアの分有という事態への着目が似像モデルのパズルのなかで示唆されていることになるが、この問題については稿を改めて、二世界説のパズル (133b-134e) において詳しく扱うことにしたい。

## 文献

- Allen, R. E., *Plato's Parmenides*, 1983.  
 ———, *Plato's Parmenides*, rev. ed., 1997.  
 Bluck, R. S., "The *Parmenides* and the "Third Man"", *Classical Quarterly* 6 (1956), 29-37.  
 ———, "Forms as Standards", *Phronesis* 2 (1957), 115-127.  
 Cherniss, H. E., "The Relation of the *Timaeus* to Plato's Later Dialogues", *American Journal of Philology* 78 (1957), repr. in R. E. Allen (ed.), *Studies in Plato's Metaphysics*, 1965, 339-378.  
 Cornford, F. M., *Plato and Parmenides*, 1939.  
 Fujisawa, N., "'Εχειν, Μετέχειν, and Idioms of 'Paradeigmatism' in Plato's Theory of Forms", *Phronesis* 19 (1974), 30-58.

<sup>11</sup> Fujisawa, pp. 51-56.

- Gill, M. L., *Plato: Parmenides*, 1996.
- Hathaway, R. E., "The Second 'Third Man'", in J. M. E. Moravcsik (ed.), *Patterns in Plato's Thought*, 1973, 78-100.
- Lee, E. N., "The Second 'Third Man': An Interpretation", in J. M. E. Moravcsik (ed.), *Patterns in Plato's Thought*, 1973, 101-122.
- Prior, W. J., "Parmenides 132c-133a and the Development of Plato's Thought", *Phronesis* 24 (1979), 230-240.
- Schofield, M., "Likeness and Likenesses in the *Parmenides*", in C. Gill & M. M. McCabe (eds.), *Form and Argument in Late Plato*, 1996, 49-77.
- Spellman, L., "Patterns and Copies: The Second Version of the Third Man", *Pacific Philosophical Quarterly* 64 (1983), 165-175.
- Vlastos, G., "The Third Man Argument in the *Parmenides*", *Philosophical Review* 63 (1954), repr. with an "Addendum (1963)" in R. E. Allen (ed.), *Studies in Plato's Metaphysics*, 1965, 231-263.

The Puzzle of Likeness Regress: *Parmenides* 132c-133a

Toru KUBO

Parmenides, by the puzzle of likeness regress, refutes Socrates' proposal to describe the relation of participation in Forms as the pattern-copy model. The argument is detected to rest on two tacit premises, the Self-Predication Assumption and the Non-Identity Assumption. The difficulty of the puzzle can be solved either by denying the Non-Identity Assumption, which is alien to Plato's original theory, or by insisting that the Form and its likeness resemble each other just because the latter as copy imitates the former as pattern. Recently, based on Socrates' earlier statement on similarity (129a), an alternative reading of the text has been purported to the effect that the alleged Form in the puzzle is the Form *Likeness*. The structure of the puzzle, then, is reducible to that of the Third Man Argument (132ab), and the difficulty can be avoided likewise by denying the Non-Identity Assumption. Either way, the difficulty of the puzzle is solvable and Parmenides' criticism turns out to be invalid and not fatal to the theory of Forms.

The pattern-copy terminology has some merits concerning the separateness of Forms: this way of description is immune to misunderstanding the relation of participation as physical immanence of Forms, and to regarding sensible things or some kind of substratum to exist independently prior to their participation in Forms. From middle period onwards, Plato constantly refined his description of participation into paradeigmatism, which is observed to culminate in the concept of *chora* in the *Timaeus*.